最優秀賞作品

コンカラドウジ

萱野　智

学校を出てからずっと、ショウジはカンタの少し後ろをついてきていた。カンタの落ち葉をふむ音に重なって、ショウジの足音がつかずはなれず、カサカサとついてくる。

カンタはくるりとふり返ってたずねた。

「帰り道、こっちなんか」

ショウジは足元を見ながらうつむき加減で歩いていたが、少しおどろいたように立ち止まって顔を上げ、「うん」とうなずいた。

「ほな、一緒に帰ろ」

「うん」

ショウジは、今度はうれしそうにうなずくと、小走りにカンタのとなりまで追いついてきた。

ショウジとはこの春に初めて同じクラスになったが、帰る方向が同じだとは今の今まで知らなかった。勉強でも運動でも目立つところがなく物静かなショウジと、運動が得意で活発なカンタとはほとんど接点がなく、これまであまり話したことがなかった。

通学路のイチョウ並木は半分ほど葉を落としていて、枝に残った葉と道をうめる落ち葉が黄金のトンネルを作っていた。二人は、落ち葉にまぎれたぎんなんの実をよけながら歩いた。ついこの間まで青々とすきとおっていた空はくすんだ灰色で、そっけない表情をしている。カンタはかたをすくめて、ジャンパーの前をしっかりと閉めた。

「寒いなぁ」

「うん、寒いね」

イチョウ並木をしばらく行って、公園に入る。木がしげり広場もあって、気候のよいときはちょっとしたにぎわいだが、今日は静かだ。風がふくたびに木々の葉が枝からはなれ、カサ、とかすかな音を立てて地面

に落ちた。
カンタは、なるべく落ち葉が厚く積もっている場所を選んで歩いた。つま先をつっこんで落ち葉をけり上げると、くつのすき間からくちた葉のかけらが入りこんでチクチクした。ショウジもカンタのまねをして、落ち葉をけりけりついてきた。
ふと、カンタは大きな葉っぱの落ちているのに気づいて拾い上げた。ボートのような形で、カンタの顔を十分におおってしまえるほどの大きさがある。
「なんやこれ。でっかい葉っぱやなぁ」
ためつすがめつながめていると、ショウジが、「朴の木の葉だね」と言った。
「ホオ？」
顔を上げると、正面に大きな木の立っているのが見えた。背が高く、枝も四方に張りだして立派な風情だ。カンタの手にあるのと同じ大きな葉が天狗のうちわのように連なって、茶色くなって重たげに下がっている。根元には巨大な落ち葉が幾重にも積み重なっていた。

二人は朴の木まで歩いていって、形のきれいな落ち葉を探して拾った。
「カンタくんは、コンカラドウジって知ってる？」
朴の葉についた土を落としながら、ショウジがたずねた。
「コンカラドウジ？」
カンタはおうむ返しに聞き返した。
「なんや、それ」
「冬を連れてくる妖怪だよ。子どもの姿をしていて、朴の木の葉っぱのお面をつけたみたいな顔をしているんだ。ほら、こんなふうに」
ショウジは、手に持った葉に指でぶすぶすと三つ穴を開けて自分の顔にあてがった。三つの穴から両目と口がきれいにのぞいている。
「コンカラドウジは、こうやって名前をさけびながらやってくるんだ」
ショウジはおもむろに、「コンカラドウジ！　コンカラドウジ！」と大声でさけんで、木々の間を、ぐるぐ

る円をえがいて走り出した。カンタが聞いたこともない、ショウジの大きな声だった。

「ほら、カンタくんもやろうよ」

巨大な落ち葉の向こうで笑うショウジの顔を見ていると、カンタもにやりとしてきた。

「よおし」

カンタも朴の葉にぶすぶすぶすと穴を開けて顔にあてがうと、「行くで！」と言ってかけ出した。落ち葉の積もった地面はやわらかくて、意外と走りにくい。ひざをもたもたと上げながら、ショウジを追いかけた。

「わっはっは、ショウジ、追いかけっこや」

「カンタくん、コンカラドウジだよ。コンカラドウジ！」

前を走るショウジの足取りは軽かった。細い足はするどく地面につきささり、バッと落ち葉をまい上げたかと思ったら、ひとっ飛びで次の地面に着地して、また落ち葉をまい上げた。運動場でのかけっこでカンタはショウジに負けたことなど一度もないのに、カンタが一歩進む間に、ショウジは二歩も先を飛びはねてい

た。

「名前を呼んで。コンカラドウジ！」

カンタもどなった。

「コンカラドウジ！　コンカラドウジ！」

名前を呼ぶたびに、足が軽くなるようだった。赤や黄や茶色の葉がはらはらとまい上がり、風に乗ってくるりと弧をえがいた。まい散る落ち葉の向こうに、ショウジの背中が見えかくれした。ランドセルのふたが開いていて、パタパタと開いたり閉じたりしていた。

「コンカラドウジ！」

「コンカラドウジ！」

二人の声は重なり合い、次第にとけ合ってひとつになり、カンタは夢の中にいるような気分だった。朴の葉に開けた穴は両目のはばより少しせまくて、カンタの目は朴の葉と外の半々を見ていた。そのぶれた視界の中で、前を走るショウジの顔と朴の葉のお面との境目が、なんだかあやふやになってきてみょうだった。お面が顔の一部のような、いやむしろ顔そのもののよ

うに思われて仕方なかった。
風がだんだん強くなってきて、ヒュウヒュウ音を立てて耳をかすめ、落ち葉はいよいよ高くまい上がり、ぶつかり合ってバチバチ鳴った。ショウジの両手はもはやお面を支えておらず、風を喜ぶかのように天に向かってつき上げられ、ぐるぐると回っていた。
そのとき、一際冷たくするどい風がビュウとふきつけ、カンタは「あっ」とさけんで顔をおおった。落ち葉がようしゃなくぶつかって、カンタは思わずしゃがみこんだ。
風はうなりながら地面にぐるりとうずをえがくと、やがておとなしくなり、何枚かの落ち葉を引きずりながら去っていった。カンタは立ち上がった。お面はどこかへ飛んでいってしまっていた。広くなった視界の中、ショウジはどこにもいなかった。

翌日、ショウジは学校へ来なかった。
「急だけど、小暮くんはご家族の都合で遠くへ行くこ

とになりました」と、先生は言った。

「忘れないで、いましょうね」

カンタは窓の外を見た。木がらしが、コンカラカラと音を立ててふいていった。